



長編部門『いたくても いたくても』 堀江貴大監督インタビュー

取材・文 = 水上 賢治

自分の想像力を試したいし、そこに賭けたい。
それが映画を豊かにすると思うんです。

――まず、SKIPシティ映画祭でもお馴染みなのですが、堀江監督は東京藝術大学大学院映像研究科の出身で、この作品『いたくても いたくても』はその卒業制作作品になります。

実はほんとうに産みの苦しみを味わったというか、ほんとうに“この企画で行くぞ”と決まったのは、クランクインの1カ月前ぐらいでした。それまでは試行錯誤の連続で（苦笑）。それまでは“これ”と思えるものがなくて、悩みました。

――舞台は通販会社。主人公の星野はこの会社の映像制作部所属で通販番組のADのようなことをやっているパツとしない社員で。そんな彼が、売り上げ低迷を何とか打破しようとする社長の鶴の一声ではじめた、商品紹介とプロレスを合わせた新番組で意外な才能を発揮していく。プロレスと通販という、このユニークなアイデアはどこから出てきたのでしょうか？

大学時代、プロレス研究会に入っていた友人がいて、彼がある会社の最終面接でイスを相手にプロレスをして受かったときいて。なんかモノとプロレスの組み合わせって面白いと思って、映画の題材になるとは思っていなかったんですけど、ずっと頭の中に残っていたんです。それで卒業制作となったとき、まず、自分の中でアクションをやってみたい気持ちがありました。というのも、それまでのカリキュラムでアクションを撮り切れていないと思っていたんです。ドラマの中でアクションが関わってくるようなものを作ったこともなければ、アクションをビジュアルとしてきちんとみせることもやっていなかった。だから、1度きちんと

アクションをやってみたいと。同時にキャッチーで娯楽性のある企画をやりたい気持ちもありました。あと、それまで作った短編が疑似家族や撮影現場を題材にしている、卒業制作として自分が藝大でやってきたことの集大成にもしたかった。そんな自分の想いと、プロレスとモノというアイデアが結びついて、こんなドラマが出来ました。

――それにしても、いろいろと異色の設定になっています。プロレスと通販番組もそうですが、星野が恋人のあおいの実家に同居していることも、さらにその家からあおいが出て、母親と星野のおかしな二人生活になることもちょっと想像しづらいことです。

水と油ほど分離はしていないけど、ギリギリつながるような状況や場に僕自身が心惹かれるところがあります。そういう何か想像できそうで想像できないようなこと、ありえるようでありえないことを描くことを恐れたくない。自分の想像力を試したいし、そこに賭けたい気持ちがある。やはり何か想像の範囲を超えたものを提示すると、人は何かを想像する。それが映画を豊かにすると思うんですよね。

――主人公の星野はプロレスに活路を見い出して、ある意味、一人前の男になっていく。よく語る男ではない彼ですが、嶺豪一さんの好演もあってひじょうにその心情が伝わってきます。

たぶん星野は傍から見ると、ダメなAD。でも、うまく自分のことを表現できなくて、変な誤解を受けて、他人に理解されないことが多々ある。なにをやっても報われなくて、損をしている気がするんですよね。そういう人間も僕は肯定したいというか、寄り添いたい気持ちがありました。なので星野に思い入れがあるのは確か。僕自身が星野に近い人間というのもあると思うんですけど。星野は頭で考えるより、体を動かして行動して物事を理解していく。僕もそういうタイプ。でも、よく周りから言われるんですよ。“ひとつ考えてから行動しろ”って（苦笑）。

――主演の嶺さんは俳優としてはもとより監督としても活躍されています。こういった経緯で起用となったのでしょうか？

まず、嶺さんとはこの作品の前に手掛けた短編に出演していた



だいて、もう1本ご一緒できたらと思っていました。で、その短編には今回、通販会社の社長役の坂田聡さんも出演しています。嶺さんはブラック企業の社員、坂田さんにはその企業の工場長を演じてもらいました。この二人の関係性が最高で、もう一度、どこかでやれたらなと思っていたことがありました。それから、僕は嶺さんのあまりしゃべらない、たまにボソッとひとだけしゃべるような感じの演技が好きで、今回の役はまさにうってつけだとも思っていて、お願いしました。

――その星野の心の変化をうまく描き出す一方で、その相手役となるヒロイン、あおいの気持ちもよく描けていると思います。

この点については共同で脚本を作り上げた木村の力が大きい。彼があおいの細かい心情を丁寧に脚本に反映させてくれたおかげです。僕は星野に完全に肩入れしていたので、そっちにどんどん引張られるところを、木村がうまく引き戻してくれて男女のドラマにしてくれた。結果的にあおいに感情移入して見てくれる人がけっこういて、ちょっととらえどころのない星野といい意味でコントラストもついて良かったです。女性と男性の価値観の違いもより克明に出すこともできました。ただ、同じ藝大の見てくれた女性たちからは散々な声をいただきました。“なにもこんなに女の嫌な部分を見せなくてもいいじゃん”って(苦笑)。

――ヒロイン役の澁谷麻美さんはどういった経緯で、SKIPシティでは『螺旋銀河』でおなじみの女優さんです。

この作品を撮る段階では僕は『螺旋銀河』は観ていませんでした。ただ、予告編を見たとき、“いいな”と。プロデューサーからも薦められて実際にお会いして、彼女で行こうと決めました。で、澁谷さんにお会いしてお芝居を見せてもらったとき、まったく僕の考えていたのと違ったんですね。ただ、嶺さんと組んだとき、すごくいい化学反応が起きて、魅力的な恋人同士になるんじゃないかと思ったんです。僕の勘でしかないんですけど(苦笑)。実際、それはうまくいったと思っています。嶺さんと澁谷さん、お二人とも独特の間をもった役者さんで、その間がすごく互いの心の距離や考えの違いを伝えてくれているように感じます。

――では、少しプロフィール的なことを。映画監督を目指したきっかけは？

もともと映画は好きで九州の大学時代には自主で作ったりもしました。多少時期は前後しますが、同じぐらいに、黒沢清監督の映画にも出会って、衝撃を受けて、映画の面白さを知り、目覚めたというか。そこからですね。黒沢監督の作品をはじめ、とにかく映画を見まくって(笑)。ただ、そのころは作り手志望ではなく、どちらかというと好きな映画を人に届けたい思いが強かったので、将来、配給などの仕事をやれたらと思っていました。でも、自分の作品が映画祭で上映される機会に恵まれ、そこで作り手の喜びを味わったというか。作品を見てくれる人がいることを体感したとき、思ったんです。“もう少し続けてみよう”と。そのまま現在に至っています。

――衝撃を受けた黒沢作品は何だったのでしょうか？

高校生のときに見た『アカルイミライ』が衝撃でした。それで大学時代に黒沢監督の作品を全部見て、勝手に思っていました(笑)。“黒沢監督のような、どこか遠くまで連れて行ってくれる

ような映画を撮りたい”と。のちに東京藝術大学大学院で黒沢監督にはお会いすることになるのですが。

――いま、今回の国際コンペティションでの選出をどう受け止めていますか？

さまざまな国の作品が揃っていますし、同じ日本人監督がアメリカで撮った『アウト・オブ・マイ・ハンド』のような映画もある。その中で自分の作品はどのくらい戦えるかと、楽しみにしています。



<上映スケジュール>

7月18日(月・祝) 17:00～ SKIPシティ映像ホール

7月22日(金) 14:30～ SKIPシティ多目的ホール

『いたくても いたくても』

男と女とプロレスと。

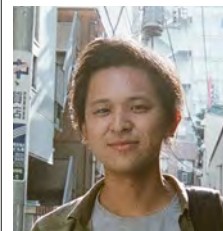
痛くても、その痛みを信じて生きていく。

通販会社の映像制作部で働く星野は、社長が突如始めたプロレス同好会に先輩とともに引きずり込まれる。星野から何かを見出した社長は、社運をかけプロレスと商品紹介を融合させた新番組を始める。

監督：堀江貴大

出演：嶺豪一、澁谷麻美、吉家翔琉、坂田聡、大沼百合子、芹澤興人、磯部泰宏、岩井堂聖子

<2015年/日本/98分> ©東京藝術大学大学院映像研究科



監督：堀江貴大

1988年岐阜県生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻監督領域修了。オムニバス映画『リスナー』(15)では「電波に生きる」を監督し、劇場公開される。本作『いたくても いたくても』がTAMA NEW WAVEコンペティションにてグランプリ、ベスト男優賞、ベスト女優賞を受賞。その後、文化庁委託事業「ndjc:若手映画作家育成プロジェクト」に参加し、短編映画『はなくじらちち』(16)を監督。